

ベーオウルフ(韻文訳四-一五五七行-一九六二行)

著者	栞矢 好弘
雑誌名	言語と文化
巻	6
号	[2]
ページ	1a-19a
発行年	2002
URL	http://doi.org/10.14990/00000374

C. L. Wrenn, published by Harrap Limited, Exeter, Devon: University of Exeter Press.

Wyatt, Alfred J. (ed.). 1962. *An Anglo-Saxon Reader*. 10th impression. Cambridge: At the University Press.

- Bessinger, Jr., J. B. (read by). 1996. *Beowulf*. Caedmon Audio. New York: HarperCollins Publishers, Inc.
- Britannica CD-Rom. 1997. *Britannica CD Version 97*. Encyclopaedia Britannica, Inc.
- Chambers, R. W. 1952. *Beowulf with The Finnsburg Fragment*. Edited by A. J. Wyatt. New edition revised with introduction and notes by R. W. Chambers. Cambridge: at the University Press.
- Chickering, Jr., Howell D. (trans.). 1977. *Beowulf: A Dual-Language Edition*. Anchor Books. New York; London; Toronto; Sydney; Auckland: Doubleday.
- Crossley-Holland, Kevin (ed. & trans.). 1982. *The Anglo-Saxon World*. Woodbridge: The Boydell Press.
- Fujiwara, Yasuaki (藤原保明) n. d. 『古英語の世界』『言語文化論集』五〇号別冊 筑波大学現代語・現代文化学系。
- Hall, J. R. Clark (ed.). 1960. *A Concise Anglo-Saxon Dictionary*. With a supplement by Herbert D. Meritt. Toronto: University of Toronto Press in association with the Medieval Academy of America.
- Harrison, Mark & Gerry Embleton. 1993. *Anglo-Saxon Thegn 449-1066AD*. Reprinted 1997, 1998. Warrior Series 5. Oxford: Osprey Publishing Ltd.
- Hasegawa, Hiroshi (長谷川 寛) (trans. & annotator). 1990. 『ベーターナマン』怪物破壊魔 (タレンデル) 退治の巻 (一) 東京 成美堂。
- Hazome, Takeichi (羽森竹一) (ed. & trans.). 1985. 『古英語大観—頭韻詩の手法—』東京 原書房。
- Kennedy, Charles W. (trans.). 1940. *Beowulf: The Oldest English Epic*. Translated into Alliterative Verse with a Critical Introduction. Renewed by the translator in 1968. First issued as an Oxford University Press paperback, 1978. Oxford; London; New York: Oxford University Press.
- Klaeber, FR. (ed.). 1950. *Beowulf and the Fight at Finnsburg*. Lexington, MA: D. C. Heath and Co.
- Kuriyagawa, Fumio (厨川文夫) (trans.). 1941. 『ベーターナマン 附 ノンズブルフの戦』岩波文庫 2714-2715. 東京 岩波書店。
- Nagano, Shigen (長谷 盛) (trans.). 1967. 散文全訳『ベーターナマン 附 ノンズブルフの争乱断章』東京 吾妻書房。
- Ōba, Keizo (大場啓蔵) (trans.) 1985. 新口語訳『ベーターナマン』改訂版。東京 篠崎書林。
- Oshitari, Kinshiro (忍足欣四郎) (trans.). 1990. 中世イギリス英雄叙事詩 『ベーターナマン』岩波文庫 赤275-1. 東京 岩波書店。
- Satō, Noboru. 1988. *An Interlinear Beowulf*. The Complete Text Edited, with the Interlinear Verbal English Translation and Interlinear Grammatical Note for Each Word, and the Opposite-Page English Translation, and with a Table of the Royal Genealogies Appended. Tokyo: Language Press.
- Suzuki, Shigetake (鈴木重威) (ed.). 1969. *Old English Poetry Beowulf*. 東京 研栄社出版。
- Sweet, Henry. n. d. *The Student's Dictionary of Anglo-Saxon*. Impression of 1953. Oxford: At the Clarendon Press.
- Tuso, Joseph F. (ed.). 1975. *Beowulf: The Donaldson Translation, Backgrounds and Sources, Criticism*. A Norton Critical Edition. New York; London: W. W. Norton & Company.
- Underwood, Richard. 1999. *Anglo-Saxon Weapons and Warfare*. Brimscount Port Stroud, Gloucestershire: Tempus Publishing Limited.
- van Kirk Dobbie, Elliott (ed.). 1953. *Beowulf and Judith*. New York: Columbia University Press.
- Wrenn, C. L. & W. F. Bolton (eds.). 1996^s. *Beowulf with the Finnsburg Fragment*. Exeter Medieval English Texts and Studies. 1st ed. 1953 ed. by

- (80) 広き道 原詩は、「地面」と「道」を意味する二語をつないで一語とする。「地面の道」とは、山中から出て、踏み分け道ではない通常の道を指すのであろう。「広き道」とした。
- (81) 蜜酒の館の庭の草地 原詩は、「蜜酒」を意味する語と「野原、平原」の意味の語をつないで一語とする。蜜酒の館を取り巻く敷地と解する。
- (82) フルンテイング 第二十二節参照(「ペーオウルフ(韻文約三)」「言語と文化」第五号、十七頁上段)。
- (83) シェデンイーイ スカンジナヴィア半島最南端の地域。(藤原(1988)による)
- (84) 手にとり 「手にとる」にあたる表現が原詩にあるわけではない。原詩では、「フロースガールが言った。柄を眺めた」とあるだけ。
- (85) 金の板 意味の明確でない単語が用いられている。Wrenn and Bolton (1986) の推測に基づく。
- (86) ルーン文字 ゲルマン民族が、ローマ字採用以前に使用していた文字。
- (87) エッチウエラ デネの王。伝不詳。
- (88) 戦陣で肩を並べた親しき友を 原詩は、「肩」を意味する語と「仲間」を意味する語をつないで一語とする。これを表記の意味に解した。
- (89) 住処 原詩には、「土地」とあるだけであるが、「住処とする土地」の意と解する。
- (90) 刃を交わす憎悪 原詩は、「刀」と「憎悪」を組み合わせて一語としたものを用いる。「戦争」の意味。
- (91) 六月が百を数える間 原詩は「半年が百回」として、半年を一つの単位とする。一年が十二か月であったという保証はないが、とりあえず「六月」を「半年」の意とした。
- (92) やがて 原詩には「やがて」に相当する語はなく、表現がつながりを欠いている。テキストによっては、ダッシュを入れて時間の経過を示すものもある。
- (93) 高貴なる勇士 当時従士は貴族であった。
- (94) 一千人の戦士従え 前行の繰り返し。従士と戦士合わせて二千人の意味ではない。同じことを言葉を換えて繰り返すのは、古期英語の詩でよく用いられる技法の一つ。
- (95) 海ゆく木 原詩は、「海」を意味する語と「材木」を意味する語をつないで一語とし「船」を表す。
- (96) この行、原詩では「陸に立った」とあるのみ。
- (97) 締め上げられて 原詩にある単語は、「手」を意味する語と「ねじる、縛る」などの意味をもつ語を組み合わせたもの。多くの現代語訳や編集されたテキストは、「ねじる」のほうをとって、「手で編んだ」の意味とするが、手で縄をなうのは、あまりにも当然のことであって、「手」という意味の語を組み合わせる意味はない。こゝは、Heaney (1999) 同様、「縛る」ほうをとった。
- (98) 理不尽なる死 原詩の語は、「死」と「悪意、悪行」を組み合わせたもの。「悪意ある行為がもたらす死」と読み、殺される側の立場にたつてこのような訳にした。
- (99) エール ビールの一種。
- (100) 暗き 原詩の単語に辞書が与える意味は、「黄色の、淡黄色の、黄褐色の、灰色の、灰褐色の、薄暗い、黒ずんだ、暗い」と様々である。現代語訳もいろいろな形容詞を用いる。こゝは、北欧の海ということを考慮し、王女の乱行のメタファーとしての意味も持たせて、「暗き」とした。

参考文献

Alexander, Michael (trans.). 1973. *Beowulf: A Verse Translation*. Penguin Classics. Harmondsworth: Penguin Books.

家臣の命奪うのは

あるまじきこと

だがこの振る舞い

ヘンミングの血縁の者

諫めとどめる

エール⁽⁹⁹⁾の酒宴に興ずるもの

その者たちのことばによれば

モードスリユーゾ黄金^{こがね}で飾り

血筋貴き若き勇士の后となる

その時以来悪意の行為

家臣に働く乱行^{らんぎょう}は影を潜める

父王の指示に従い

暗き海⁽¹⁰⁰⁾こえ旅をして

オッフア王の館^{やかた}に行きしとき以来

それ以後はオッフア王のもとにあり

王妃の座につき

徳高きこと世に知られ

運命の定める生を

心正しく楽しみ送る

この詩人^{うたびと}の知るところ

二つの海が取り囲む中

全人類の最高者

人類の鑑 英雄たちを導く王

一九四五

オッフアに対し大いなる

愛をささげる

オッフア王 槍をとって豪胆の人

財宝頒ち 戦^{いくさ}に強く

王国のいたるところで

人びと王を尊び敬う

王 知力をもつて国土治めた

戦^{いくさ}に強きガールムンド その人の孫

ヘンミング一族の男^{おとこ}エーオメール

オッフアから生を受け

後 戦士ら助ける者となる

一九六〇

一九五〇

注

(75) 壁にかかる 原詩のこの部分にはないが、第二十四節冒頭部にある。

(76) 第二十二節「言語と文化」第五号、十七ページ下段) 参照。

(77) 今いちど この表現は原詩にはない。前後の関係を明確にするために加えた。

(78) 側近 原詩では、「炉床「暖炉の床の部分—火を燃やすところ」の仲間」という意味の語が使われている。「二つの暖炉を囲むもの」の意であろう。

(79) 王 原詩には、「黄金」と「友」を結び付けて一語とした単数の語があり、「人びとの黄金の友」となっている。こゝは、Heaney (1999) の読みをとって「王」とした。

この武人船幅せんぷく広きこの船を
錨網いかりづなにてしつかりと浜辺に固定

見ばえ良きこの木船

波の力に攫さらわれることないように

貴人たちが所持した宝物

飾りほどこそす武具甲冑

金の延べ板

これらのものをベーオウルフは

陸揚げすることを命じた

フレーゼル先王の息

宝物頒ち与える人

ヒイエラーク王

この王を訪ねる道のりは

何ほどもない

海に臨む岩壁いわかべ近く館やかたを構え

重臣たちと居をともにする

その館やかた 偉容を誇り

王威風堂堂たるもの

広間にあつて高き玉座に

后きさきのヒユイド ヘレスの娘

この砦の住まい短いとはいえ

いと若く聡明にして教養高く

物惜しみせず恬淡てんたんとして

貴き財宝イエーアト人びとに
頒ち与える

一九三〇

モードスリユーゾ

国民の良き王妃

王女の日は心中に

恐ろしき罪業ざいごう秘める

この女性にょしやうの側そばにいるもので

大君除きいかなる勇士も

この女性にょしやう昼の光で

見つめる勇氣ある者はなし

見つめた者は繩をうけ締め上げられて(97)

逃れえぬ運命さだめが己を待つと知る

逮捕の後のちは速やかに

剣が物言い 事の解決

金銀の象嵌ざうがんほどこそす太刀による

理不尽(98)なる死の宣告なり

かかる行い王妃にそぐわず

女人にょにんのなすべきことでない

見目麗しき人とはいえ

和平つむ紡ぐべき女性にょしやう

侮辱おとしうけたと邪推して

親愛の情抱くべき

一九三五

一九四〇

鉄輪かなわつないだ鎖帷子くさりかたばら

鎖鎧くさりよろいに身を包み

波寄よす浜に進み来た

沿岸守るあの武者は

戦士たちの帰国の姿

到着の日と同様に目に留める

客人まろうとたちに崖の上から

侮蔑まろのまなざし向けはせず

出迎えのため馬を走らせ

ウエデルまたの名イエーアトの

武人に対し口開きいう

「輝く甲冑身にまとう戦士たち

歓待受けた御方おんかたがた 貴殿らは

船ふねに向かつて進まれよ」

船幅ふなばた広く輪型の舳もつ船は

浜辺にあつて

武器甲冑 数頭の馬 宝物ほうぶつを積む

フロースガール秘蔵の宝

その上高く帆柱が立つ

船の見張りを勤めた者に

ベーオウルフは

金の帯まく太刀を授ける

伝来の宝 この宝剣の授与により

一八九〇

後の日の蜜酒を汲む宴の席で

イエーアトの勇士の榮譽

さらに高まる

船 岸を離れ

深き水かき分け進む

戦士たちデネ人びとの国を去る

海の衣きぬ 帆が帆柱に結ゆわえられ

海ゆく木(95) 船がきしる

波浪を越えて渡る風

波に浮かぶ船の進路を妨げず

海ゆくものは進みゆく

船首泡立ち波頭はとうを越えて

輪型の舳もつ船は

潮うしおの流れ乗りこえ進む

イエーアトの崖

見知った岬が目はいに入る

船 風に押されて進みゆき

陸(96)に乗り上げ浜辺に止まる

船着場守護する武者は

早くも渚なみに出でて立つ

この者が親しき人の姿求めて

潮うしおの向こう遙か彼方に

目を凝らし始めて幾日もたつ

一九〇〇

一九一五

一八九五

一九一〇

一九〇五

フロースガールは

十二品の宝物広間の中で

ベーオウルフの手に渡し

この贈り物もち速やかに

邦人のもと無事たち帰るべしという

シユルディング人統べる王

血筋貴きこの人は

類まれなる武人に口づけ

首かき抱く

頭に白きもの混じる君王の目に涙

年老いた英明なる王

心中の思いは二つ

王は思う

われら相見えること

勇者と勇者のこの出会い

これが最後と

この思い胸締めつける

王は抱く

ベーオウルフに親愛の情

その思いまことに強く

波たつ胸中抑ええず

親しき人にひそかに寄せる

強き思いは心の糸で

一八七〇

しつかりと王の心に結ばれて

血潮の中で燃え上がる

贈られた黄金を誇る戦士

ベーオウルフは宝物喜び

王のもと辞し

草生す大地を踏みしめてゆく

海行く船は錨を下ろし

船主を待つ

フロースガールの贈り物

海原わたる帰国の途上

度重なる賞賛受けた

何事にも落ち度なく

比類なき王だった

だがやがて老いが

力を振るう喜び奪う

幾度となく数多の者に

損傷与えたその力

一八七五

一八八〇

一八八五

第二十七節

武勇優れた武人たち
若武者たちの一隊が

その人にとり利益あること」

フロースガール王応えて宣うのたま

「今の言の葉 英邁えいまいなる主がしゅが

そなたの心に送られたもの

これほど思慮に富む言葉

そなたのような若者が

語るを聞いた覚えはない

そなた 力強大にして

知能に優れ ことば思慮に富む

余は思う

フレイゼル先王の息

そなたの主君 国民くになみを守る御方おんかた

ヒイエラーク王

槍や太刀 死力を尽くす激戦に

あるは病に斃れるならば

そしてそなたに生あれば

海原渡るイエーアトの民

王に選ぶはそなたのみ

一族の国そなたに守る意思あれば

英雄の宝の守護者しゅごに選ぶ仁

そなたに勝る者はない

親しき友ベーオウルフよ

余はそなたの心

一八四〇

知ること長きに及ぶに従い

ますますそなたが好ましく

われらの和平そなたはもたらず

二つの民族イエーアト人びとと槍のデネ人びと

平和に交わり敵意の行為 争いを絶つ

かつては争い鎬削しのぎったこともある

だがしかしこの広き王国

余の支配下にある限り

財宝互いに頒ちあう

多くの者が良き贈り物もち

海鳥うみどりの水浴びるところ海原渡り

互いに敬意を示すであろう

輪型のへさきもつ船が

海原越えて贈り物

友好の印を届けることになる

余はわが国民くになみ

敵味方いずれの者に対しても

いかなる点でも粗相なく

古きしきたり伝わるとおり

ゆるぎなき態度で臨むことを知る」

かく語った後武人の庇護者

へアルフデネ先王の息

一八五五

一八四五

一八六〇

一八五〇

一八六五

武器甲冑に身を固め

デネ人にとり貴き王子

戦に臨んで勇氣示した英雄は

フロースガールの座する玉座に

歩み寄り挨拶交わす

一八一五

先に為したあのように

近隣のもの恐怖を与え脅かすこと

溢れる水の広がるどころ

海原の彼方より

それがし耳にするならば

一千人の従士従え

一千人の戦士従え

ご援助のため罷り越す

イエーアトの君主ヒエラーク王

国民保護するこの王は

歳若けれど言葉と行為で

それがし支え

陛下の兵が足りぬとき

わが力補う槍の森なす一隊を

陛下の援助に連れゆかせること

それがしは知る

陛下の皇子フレスリーチ

陛下の御心により

イエーアト人の宮廷を

お訪ねあるなら

殿下はそこで多くの友を

得られることになりましょう

遠つ国国秀でたる人訪ねるならば

第二十六節

エツヂセーオウの御子

ペーオウルフは口開く

「さて われら遠き方より

海原を渡り来た者

ヒエラークのもと帰還を望む

この地において申し分ない

もてなしを受け

陛下から歓待の栄を賜る

人人を導く御方

この度の戦のごとき行いにまし

この先この世で何事にせよ

御覚えめでたくすることあるならば

それがし即刻馳せ参じましょう

陛下に憎しみ抱く者

一八二〇

一八二五

一八三〇

一八三五

席を求めて歩みゆく

広間に居並ぶ

勇名はせたイエーアト人^{びと}に

前と変わらぬ見事な酒宴

ここに改め用意さる

やがて夜⁽⁹²⁾の帳降り

戦士ら闇が包み込み

広間の一同立ち上がる

齡^{よわい}重ねたシユルディング人^{びと}

頭に白髪まじる王

床に就くこと望まれる

令名高き盾もつ戦士

イエーアト人^{びと}も休息切望

ただちに侍従

魔物退治に疲れた武人

遠来の客を案内し寝所^{しんじよ}に導く

侍従は礼節わきまえて

海原を越え来る戦士がその当時

必要とした品品すべて

不足ないよう整えた

心広き王 床に就き

黄金で飾る館は高くそびえ立つ

一七九五

客人は館内にて眠りにおちた

やがて漆黒の明け鴉

朗らかに天の喜びを告げ

夜の影消え輝く光現れる

高貴なる勇士⁽⁹³⁾ かの戦士たち

帰心矢のごとくとなり

急ぎ帰り支度に取りかかる

遠き方より訪れた

豪胆の人ベーオウルフ

今望むのは

遠くに舫った船に向かい行かんこと

この勇士フルンティングを

エツヂラーフの息ウンフェルスのもと

持ち運ぶことを命じた

ウンフェルスの太刀

この大切なる鋼の刃を

持ち主のもと持ちゆけと命じた

戦に強き戦場のよき友だったと礼を述べ

太刀の刃を非難すること

一言たりと口にせず

心気高き人物である

戦士たち旅立つ心逸り

一八一〇

一七九〇

一八〇五

一八〇〇

一〇

及ぶ者なき優れた人物
ペーオウルフよ

心して破滅もたらす邪心退け
選び給え

そなたの為になることを
永久なる恩寵を

驕りの気持ち心に呼ぶな
人に知られた戦の英雄

そなたの輝く力の栄光
其は一時のもの

やがていつかは病か刃が
あるはまた包む猛焰

寄せ来る水が
攻め寄す太刀が

飛び来る槍が
空恐ろしき老齡が

そなたの力奪うであろう
目の輝き薄れ眼光の鈍る日も来る

優れた戦士よ 死が
突然そなたを打ち負かす

「さて余は六月が百を数える間
この天の下 鎖鎧の民デネ人治め
いたるところで数多部族と相争い

一七六〇

一七六五

一七七〇

彼ら敵から 槍と太刀から
わが国民を守りぬく

それ故に この大空の広がりのもと
余に敵するものあるとは思わず

さする時わが国内で事態一変
喜びは失せ悲嘆の苦しみ

かつての仇 グレンデル
余の侵略者となる時のこと

かの迫害 余の心 日夜苛み
余は大いなる苦悶のうちに日日過ごす

余 命ながらえ戦い済んで
グレンデルの血に染む首級

この目で見ると神に謝す
永遠なる神に謝す

武勲類まれなる勇者
さあ席につかれよ

宴の喜び味わい給え
朝になれば余からそなたに
数多の宝授くべし」

イエーアトの武人はすかさず
心弾む思いして

賢き王の命じたごとく

一七七五

一七八〇

一七八五

世界の一部 広大なる王国の

支配をまかせられ給う

男おろかにも生の終わりが

己に来ること念頭になし

何不自由なく日を送り

暮らし妨げるもの何一つない

病を知らず老いるを知らず

悲しみに心曇ることもない

いづれの地にも敵意なく

刃まじえる憎悪を知らず

世の中すべて思いのまま

事態の悪化つゆ知らず」

第二十五節

「やがて心に驕りが芽生え

振る舞い傲然

魂守る心の衛士は

深き眠りの中にある

その眠り苦悩に閉ざされ

目覚めを知らず

殺害を企てる者

一七三五

弓矢手にして間近に忍び

悪霊の妖しげなる教唆に従い

邪なる思いをもって矢を放つ

鋭き矢 兜の下の胸を射る

男 己を守るすべ知らず

長きに過ぎた統治の年月

己が手中にした宝

些少に過ぎると目に映る

いらだつ心中欲深さ増し

黄金が覆う宝環を

誇らしげなる面持ちで

家臣に与えること拒み

栄光の支配者 神が

与え給うた栄誉を忘れ

行く末のこと思慮の外

やがて現身は朽ち

運命のままに逝いたもの

男の跡継ぐ別なる者は

財宝を

英雄がかつて手にした年経る宝を

物惜しみせず臣下に頒つ

何一つ不安を覚えること知らず

わが親しき友

一七四〇

一七五五

一七五〇

一七四五

われら二人約束交わしたそのとおり
そなたとの絆切ることはない

そなたは必ずこの先長く

同邦人に安心与え

頼みの綱となられよう

デネの王 ヘレモード

そなたのごとき人ならず

エツヂウエラ(87)の末裔たる

誉れ高きシユルデイング人びと

つまりは デネの国民に

頼もしき王とはならず

力得しとき民の喜ぶものとはならず

デネ人殺め破滅に導く

食卓を共に囲んだ家臣らを

戦陣で肩を並べた親しき友を(88)

怒りにまかせ死にいたらしむ

この悪名高き君主はやがて

人の得る喜び奪われ

孤独のうちに絶え果てる

神 この王を力強き者として

力の享受うけさせ給い

人の及ばぬ剛力を授け給うた

しかるに王は

一七二〇

血むさぼる思いいや増し
榮えある名声得るために

デネ人に宝環与えることをせず

楽しみ知らぬ生送り

人と争い痛手受け

長きに渡り民苦しめた償いに

痛苦に悩む

ベーオウルフよ

そなたはこれを他山の石とし

徳をつまれよ

今ヘレモードのこと話したは

年功積んだ分別による

強力な神

寛き御心により人びとに

知恵と住処(89)と気高き心願かち授ける

その様語るは素晴らしきこと

神 万物を支配し給う

時として名ある部族の一人の男

その心 赴くままにゆかせ給う

祖国にあつてその者に

世俗の喜び与えられ

国民守る都を授け

その統治をゆだねる

一七二〇

一七二五

一七二五

一七三〇

デネの君主の手に落ちる

この王に対して敵意を抱き

神に仇^{あだ}なし 殺戮の罪

度かさねたかの生き物

その母ともども世を去った後^{のち}

デネの領土シェデンイーイ⁽⁸³⁾で

宝物^{ほうもつ}与えた王者たち

二つの海に挟まれた

地に君臨した王者たち

その王のうちひとときわ秀でた

君王にこの見事な柄^{つか}が渡される

フロースガールは言葉かけ

その柄手にとり⁽⁸⁴⁾

古き時代^{とき}より伝わった

この宝を見つめた

柄^{つか}は記す 古き時代^{じだい}の争いの

事の起こりを

海原の怒涛押し寄せ

巨人族 水に滅^{ほろ}びる

彼ら大いなる苦しみ受けた

彼ら永久^{とこしえ}の主^しに離反せる者ども

それゆえ神はこの者たちに

大波もって最後の罰を与え給うた

一六九〇

選りすぐった鋼^{はがね}を鍛え

ひねり加えた柄^{つか}をつけ

柄頭^{つかがしら}には蛇飾る

この大太刀^{おおだち}は

何人^{なんびと}のため作つたものか

柄^{つか}に嵌めた輝く金のプレート⁽⁸⁵⁾に

ルーンの文字⁽⁸⁶⁾を刻んで告げる

その時 賢明なる王

へアルフデネの御子^{みこ}口開き

一同静まる

「さて 国民^{くにとみ}の中にあつて偽らず

正しきを行い

わが祖国護り来た王

老いたるこの王

遠き日のもろもろのこと思い出す

この武人^{つわもの}ほどの兵

いまだこの世に生まれせず

わが友べーオウルフよ

そなたの誉れ 遠き方いたるところに

また ありとあらゆる

部族の上に輝きわたる

そなたはその力 何事につけ

分別もち沈着^{しんせき}に行使用する

一七〇五

容易きことにはあらず

この戦 熾烈きわめた

神のご加護なかりせば

戦闘は即刻終わりしものと存ずる

フルンテイングは名刀なれど

この太刀いっかな役立たず

だが 人びとを支配する神

年経りの見事な大太刀

壁にかかるを見させ給い

その太刀わが戦いの武器とする

神 幾度となく

味方もたぬこのわが身導き給うた

好機到るその時に

それがし魔窟の守り手切り捨て

魔物から血潮吹きだす

戦陣に見る血潮

その最も熱きもの吹き出だし

鈍浮く刃燃え尽きた

この仇敵の魔窟から

その太刀の柄持ち帰る

デネ人殺めし非道の行為

われ応分の復讐なした

今から述べるわが言葉

一六六〇

信じ給え ゆめ裏切らず

シユルディング人の君主よ

陛下はこの後

牡鹿館でお供の方と

御心やすんじ安眠されん

従者の方がた誰ひとり

国民もまた誰ひとり

百戦錬磨の戦士たち

若き武人も誰ひとり

眠りに就いて憂う者なし

過ぎし日陛下の御胸おあった

戦士たち魔界のもの

餌食と果てる

あのご心配もはやご無用

一六七五

一六六五

その時金で飾った柄

古き時代に巨人が仕上げた黄金の柄が

齢重ねたかの英雄

白髪いたたく御大将

フロースガールの手に渡る

驚嘆の技もつ鍛冶たち

古の代に仕上げた細工

邪鬼たちの滅びた後に

一六七〇

一六八〇

主に従う戦士たち

強き主の身体から

鎖鎧と兜すぐさま取り外す

湖面は風いだ

雲たれかかる水面なお

魔物殺害の血で赤く

一行その場を離れ去りゆく

心晴れて踏み分け道ゆき

広き道 勝手知つたる道を行く

王のごとく豪胆な

戦士たち水際の崖から首級を運ぶ

剛勇の士二人の手には余るもの

四人がかりで槍の柄に下げ

重みこらえて黄金の広間へ

グレンデルの首運ぶ

戦において後れをとらぬ

勇敢なる十四人のイエーアト人は

行進の末やがて広間に

隊を率いるベーオウルフは

戦士に囲まれ誇らしく

蜜酒の館の庭の草地踏む

その行為大胆にして

武勲数限りなく

一六三〇

戦いで恐れを知らぬ

戦の英雄 戦士の首領は

フロースガールに拜謁すべく

館の内に歩み入り

グレンデルの首 髪の毛つかみ床に置く

人びとが酒酌み交わし居る床に

身の毛もよだつこの首が

戦士たちの面前に

座を共にした王妃の前に

驚嘆すべき光景だった

人びと目を離しえず

一六三五

一六五〇

第二十四節

エツヂセーオウの息

ベーオウルフはかく語る

「さて、ヘアルフデネ先王の御子

シユルディング人の総帥陛下

今ここにご覧の水底の戦利品

勝利の証とて喜び勇んで

われら持ち来たりしもの

水中のこの戦終えなお生あるは

一六四五

一六五五

イエーアトの武人たち
暗澹として岬に座し

ひたすら湖面に目を注ぐ

詮無いことと思いながらも

親しき主君その人の

姿見んと心を捨てず

その時 太刀は

戦いの熱い血潮に熔け始め

戦の太刀が戦場の

氷柱となつた

時と季節を支配する神

運命を決めるまことの主

父なる神が霜の足枷

氷の足枷とくときに

凍れる水が溶けるがごとく

刃がすっかり消えうせた

不思議なことなり

多くの宝玉

嵐恐れぬイエーアト人の

王子の目に入るとはいえ

王子 宝玉携え帰ることはせず

王子が魔物の住処から
持ち帰ったのは首と柄のみ

一六〇五

宝玉輝く柄一つ

鈍浮く刃は燃え尽きて

あの刀すでにない

魔物の血潮さほどに熱く

魔界の霊は毒を持つ

その魔物 魔界に死して今は亡い

この戦いで仇を斃し生き延びた

勇者はすぐさま水かいくぐり

水面目指して泳ぎ行く

魔界の魂魄 生命ある日目を捨て

はかなきこの世を去つたとき

寄せ来る波と大海原は清らかに

船人守るこの武人 剛勇の人

水かきわけて陸地に到る

携えて来た大荷物

水底で得た戦利品

この人の心を満たす

そのとき異彩を放つ戦士の一隊

船人を守護する人に進み寄り

この勇士を迎え

わが主の無事なる姿喜び

神に謝す

柄握りしめ太刀振りかざす

一五七五

この刃用を果たした

報復の太刀を浴びせる
屍 肉裂け 頭は落ちる

一五九〇

だが時を移さずグレンデルに

今いちど報復するのが勇者の望み

一度にあらす幾度となく

グレンデルがデネ人に

なした襲撃 その報復を

フロースガールの側近を

グレンデル眠れるままに

無残に殺害

十五人のデネの人びと

昏昏と眠る中を食い殺し

あるはまた おぞましき事

十五人をさらい連れ去る

グレンデルのこの所業

剛勇の戦士に仇討たれ

牡鹿館の戦いで

この勇士から受けた手傷

その時のまま

戦のために力萎え

生命なく臥所にあつた

ペーオウルフは屍に向かい

渾身の力をこめてここで再び

一五八〇

朱に染まる様を見る
髪に白きもの混ざる

勇者について語り合う

ふたたび見えることあるまいと

勝利を収め意気揚揚と

令名高き王の前

参上することあるまいと

この時 多くの者にとり

水の獣がペーオウルフを

打ち斃したこと疑う余地なし

時刻そのとき第九時となる

勇ましきシュルディング人の面めん

岬を払い

王は館へ引き上げ給う

故国を後に訪れた

一六〇〇

ベールオウルフ (韻文訳 四 一五五七行—一九六二行)

柁 矢 好 弘

第二十三節

死を覚悟して

一五六五

怒りにまかせ振り下ろす

女怪物の首 この刃には抗しえず

輪状の骨砕け

天命尽きた身体を

刃切り裂き

女怪物床に伏す

太刀には血のり

勇者 成果に満ち足りる

灯火はひとときわ明く

巢窟の中にきらめく

天空のろうそくが

空から明明と輝くごとくに

ヒイエラーク王の重臣 ベールオウルフ

巢窟見渡し 壁際に沿い歩を運び

怒りあらわに決然として

そのとき勇者

勝利の誉れ高き太刀

壁にかかる甲冑(75)の中に認める

巨人の手になる古き太刀

頑丈な太刀 戦士の誉れ

二つとはない業物わざものの中の逸品

だが その大なること

余人には戦いの場に持ち行けず

裝飾ほどこす見事なる太刀

巨人が手並み見せた名刀

シユルディング人びとのヒーロー

憤怒の形相ぎやうそう猛猛たけだけしく

この太刀に手をかけ

輪飾りつけた柄つかひつ掴み

輪型紋わがたもんの刃引き抜き

一五六〇

一五七〇